

b. その他の菌種

A. flavus, *A. niger*, *A. terreus* なども分離されるが、外耳道では *A. terreus* が多い。

4. フサリウム (*Fusarium*)

角膜真菌症の主要病原菌で鎌状、三日月状の大分生子を生ずる。

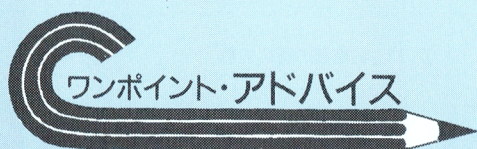
おわりに

真菌検査の手技、菌所見について述べたが、検査成績は診断を左右する重要なものであるから、慎重に行

われるべきである。同定については多くを述べなかったが、専門研究者の助言を受けるようお勧めする。真菌が検出されなければ真菌症とは診断できないということを重ねて述べておく。

文 献

- 1) 松崎統：真菌検査への招待，文光堂，1977.
- 2) 松崎統：ミズムシ，タムシその仲間，協和企画通信，1985.
- 3) 文部省総合研究・真菌症班：病原真菌同定の指針，文光堂，1986.
- 4) 松崎統：臨床微生物検査における真菌の分離，同定，Tokyo Tanabe Quarterly, No. 37, pp. 47~54, 1989.



ワンポイント・アドバイス

生理検査での患者対応のコツについて種々述べてきましたが、生理検査は患者を直接検査する検査であるため、医療事故につながる可能性があります。そこで今回は、事故を起こさせないようにするための対策や対応策について述べます。

問題のある検査は、患者の身体に負荷のかかる肺機能検査やマスター2階段心電図検査

など簡単で手軽な検査で通常よく行われている検査です。肺機能検査では、患者さんが努力しすぎて発作が誘発されたり、酸欠状態になったりした場合の対応や処置について考えておかねばなりません。また負荷心電図検査では、階段での転倒や発作などに気をつけていなければなりません。

小児の場合、9インチの段差があるマスター階段の登降は危険であり、患児の状態をよく把握している母親に手を持ってもらって行うとよいでしょう。入院患者では、点滴中の負荷検査の依頼も多いのですが、末梢静脈へ点滴中の場合は、特に注意して行うようにしています。また経静脈高濃度輸液の場合

は、中心静脈にカニューレが留置されているため問題も多く、主治医に立ち会ってもらって、事故のとき直ちに対処できるよう態勢を作っておくことが肝心です。

また中年女性の中には、必要以上に神経質な方がおられ、ベッドの汚れや、自分自身のコンディションなどが気になり、スムーズに検査ができないことがあります。負荷後にヒステリックになったり、いたずらに疲労感を訴えたりすることも珍しくありません。そこで、常時医師に監督してもらい、事故の起きないように、また万一事故が起きたときにも、早急に対処できるよう配慮しておくこと

が必要です。

われわれ技師は主治医からの指示により検査を行います。臨床検査技師法では医師の監督上でしか(検査の指示と同時に監督を行う義務が医師にはあります)生理検査などの検査業務ができないため、検査での医療事故が起きても直接責任は問われない建前にはなっています。しかし、検査を行うのはわれわれ技師ですから、事故を起こさないよう、患者さんの状態を把握し、負荷前の検査成績の正確な結果を、読み取れるように勉強をしなければなりません。

(阪大病院中検 澤崎憲夫)

生理検査…患者への対応のコツ (4) 医療事故への対策